

秋田市文化創造館

プレ事業

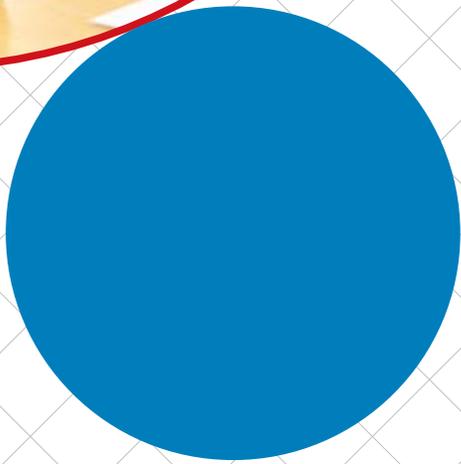
2020

記録冊子

「乾杯ノ練習」



2021年3月21日オープン



秋田市文化創造館は 3つの考えのもと、6つの基本方針で、“文化創造のまち”を目指す新しい文化施設です。

3つの考え

## 1 新たな文化創造を目指して

秋田市文化創造館は、未来に向けて新しい価値を生み出す「文化創造プロジェクト」の拠点として、出会い、つくり、はじめる場となります。また、中心市街地の魅力を高める「芸術文化ゾーン」の核として、新たなまちの未来をつくります。

## 2 基本理念

秋田市文化創造館は、すべての人がクリエイティブ（創造力）を発揮するための文化創造拠点です。創造力とは、誰もが潜在的に備えている力。新しいものに触れたい、つくりたいと願う、人が生きる上での根源的な力でもあります。秋田市文化創造館は、市民一人ひとりの創造力を育むため、すべての人に場を開き、学びと出会いの機会、活動のための環境、情報発信等のサポートを提供します。また、専門家等と協働して実験的なテーマに取り組む事業を通し、新たな思考や創造のきっかけを生み出します。さらに、施設で生まれた活動やアイデアを積極的にまちに開き、秋田の魅力づくりに貢献します。

## 3 大切にしたいこと

- ・自由で柔軟な環境をつくること
- ・市民一人ひとりの創造力を尊重し、応援すること
- ・生み出された多様な価値をひろげること

6つの基本方針

## 1 空間の提供 すべての人に開かれた環境をつくる

魅力的な建築空間を活かして、すべての人に開かれた寛容な環境をつくります。多様な人が共に過ごし、創造力を養い、発揮するための「余白」を生み出します。

## 2 機会の提供 創造力を養う出会いの機会をつくる

創造力を養うための機会を創出します。背景や価値観の異なる人が集まり、ともに創り、交流し、学び合うことで、新たな知識や視点に出会い、主体的な意欲を掻き立てます。

## 3 創造支援事業 創造力を発揮する活動を支援する

コーディネーターが利用者のアイデアの実現や発表、情報発信をサポートし、創造力の発揮を支援します。日常に息づく創造力を高め、まち全体を魅力的にしていこうと目指します。

## 4 創造実験事業 創造力を刺激する実験的事業を行う

多様な分野の専門家を招いたイベントや、クリエイターとの協働プロジェクトなど実験的なテーマに取り組み、新たな視点をもたらす自主事業により市民の創造力を刺激します。

## 5 地域連携 創造力を秋田のまちにひろげる

近隣の歴史・文化施設、商業施設や施設外のエリア、他分野の事業とも連携します。アイデアや企画を地域に開くことで新たな価値を生み出し、未来の文化を創造する力を秋田のまち全体にひろげます。

## 6 情報発信・アーカイブ 活動の過程と成果を発信しアーカイブする

活動をウェブサイトや刊行物などを通じて記録・発信し、アーカイブしてより多くの人を巻き込みます。全国各地で文化創造を試みる人々と情報共有し、よりよい施設運営に活かしていきます。

## プレ事業 “乾杯ノ練習”とは

秋田市が2019年度から実施した、秋田市文化創造館の開館に向けた機運を高めるためのさまざまなイベント・プロジェクトの愛称。

秋田では宴会の席で、参加者が全員集まる前に「乾杯の練習」と称して飲み始めてしまう慣習があることから発案されました。秋田市文化創造館の開館（＝乾杯）前に、ちょっとだけ先に企画や活動を始めてみましょう。大丈夫、練習、練習。

もくじ

### 未来の生活を考えるスクール

#### 第1回「未来の生き方をイメージする」 4

藤浩志、棟久敬、鈴木祐丞

#### 第2回「個性と多様性と—自由にふるまい表現すること—」 6

鈴木一郎太、柚木恵介、橋本誠

#### 第3回「発酵と創造」 8

小倉ヒラク、石倉敏明

#### 第4回「農業・遊び・絵本—子どもが世界と出会うとき—」 10

菊地晃生、工藤留美、澁谷香織、小熊隆博

### みんなで乾杯の練習

#### 「フードグランプリ～限界飯編～」 12

#### 「ダイアリーシアター～千秋公園編～」 14

#### 「デイ・ダンス・クリエイション+カンパイ!オルケスタ」 16

#### 「カルチャカイ」 17

#### SPACE LABO 18

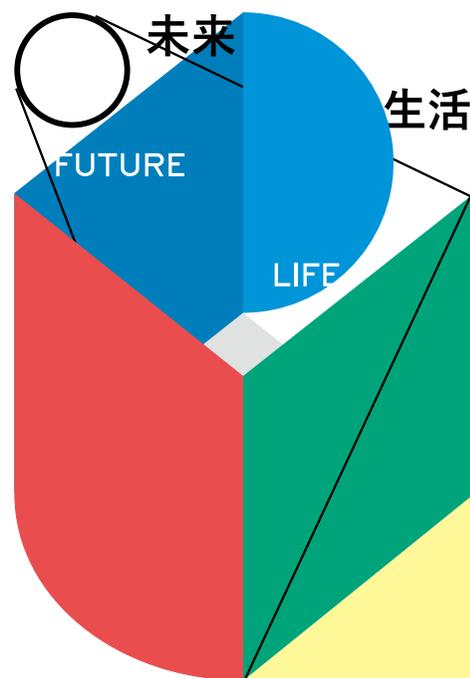
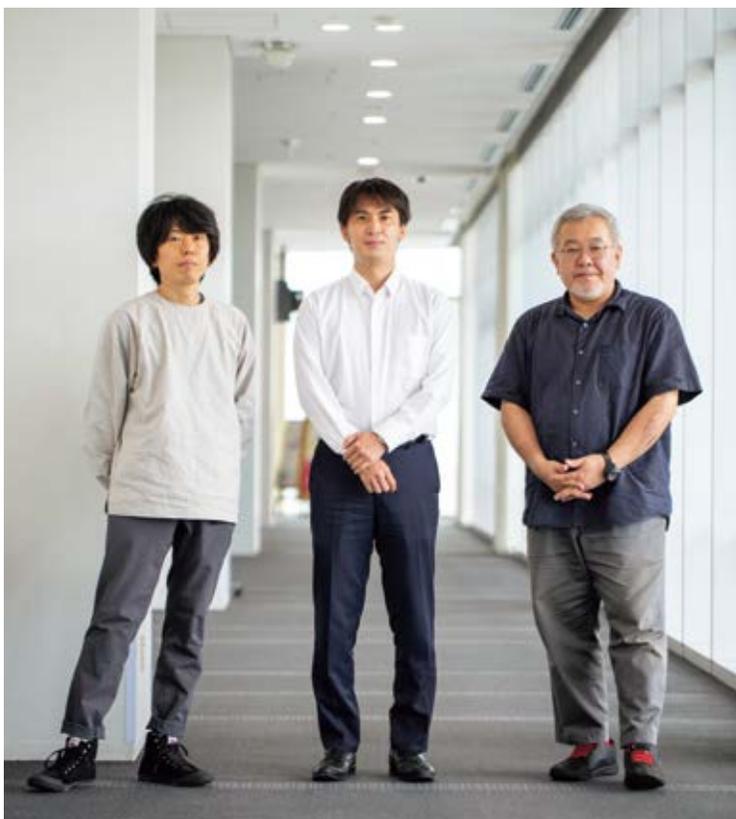
# 未来の生活を考えるスクール

# 1

新しい知識・視点に出会い、  
今よりちょっと先の生活について考えるトークイベント（全4回）

## 第1回「未来の生き方をイメージする」

鈴木祐丞 棟久敬 藤浩志



**藤浩志 Hiroshi Fuji**  
(写真右 秋田公立美術大学大学院教授・美術)

奄美大島出身の両親の影響で大島紬で遊んで育つ。京都市立芸術大学在学中演劇に没頭した後、全国各地の現場でプロジェクト型の表現を模索。同大学院修了後バブアニューギニア国立芸術学校に勤務し、原初的表現と社会学に出会い、バブル崩壊期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。「地域資源・適性技術・協力関係」を活用したデモンストレーション型の美術表現により「対話と地域実験」を実践。

**棟久敬 Takashi Munehisa**  
(写真中央 秋田大学講師・憲法)

1982年生まれ。一橋大学大学院法学研究科博士後期課程単位修得退学。2016年より現職。

**鈴木祐丞 Yusuke Suzuki**  
(写真左 秋田県立大学助教・哲学)

1978年北海道生まれ。筑波大学大学院修了(博士(文学))。専門は実存哲学。ケルケゴール、ウィトゲンシュタインといった哲学者の思想と向き合いつつ、人間という存在とその生き方について考察を続けている。2014年より現職。著書に『ケルケゴールの信仰と哲学』(ミネルヴァ書房2014年)、訳書に『ケルケゴールの日記』(講談社2016年)、『死に至る病』(講談社学術文庫2017年)がある。

このまま続いていくと思われていた日常が、いま、大きく変化しています。  
私たちの生活はこれからどうなっていくのか。  
秋田の大学で教鞭を執る美術、憲法、哲学の専門家が語り合いました。

鈴木氏「新しいこれまで存在しなかった人間関係が問われています。だから立ち止まって、考えるべき問題がどこにどう転がっているのか、一つずつ取り出し、話してみる場が必要だと思います」。

### 「個人の自由」vs「新しい生活様式」

藤氏「秋田市文化創造館がもうすぐ動き始めます。この館がどういう場所であるか、ということは、今日のトークとも関わってくる。僕が抱えているモヤモヤした違和感をどれくらい共有できるのか、哲学と憲法の専門家のお二人にぶつけていきたいと思っています。違和感からさまざまな活動が発生すると捉えているからです。コロナ以前の僕の活動や場の作り方は、2つの関係してないものが混じる接点を開発する、工作でいう「のりしろ」、「関わりしろ」という言葉も使ってきました。ところがコロナ渦になり、ディスタンスをとることを考えたら、個人と団体の関係や距離について見直す時期にきているのではないかと思います」。

棟久氏「憲法学で最も基本的な理念は“立憲主義”です。“権力を制限し、それによって個人の権利や自由を確保する”ために、権力分立や法の支配が必

要だとする概念です。つまり立憲主義とは「国家権力vs個人」の関係を考えよう、というもの。立憲主義の考え方では、個人というものは自律していて、自分の人生は自分で判断して、誰からの干渉もなく自分で決めることができる存在。そして自分の権利が権力によって侵害されたときには決然とそれを訴える力を持っている強い個人、が想定されています」。

鈴木氏「例えば“新しい生活様式”というものが提示され、そこでは事細かに指示が出されている。マスクをしましょう、身体的距離を取りましょう、レストランで食事するときは対面ではなく横並びになりましょうとか。これも個人の権利とか自由と、公共の福祉との葛藤だと思うのですが、当然持っていたはずだった権利や自由が、制限されて然るべきなのか、という問いが、このコロナ渦において形をとってきていると思います」。



全文はこちらから

### 「未来の生活を考えるスクール」

第1回「未来の生き方をイメージする」  
日時 | 2020年8月8日(土) 14:00~16:15  
会場 | YouTubeチャンネル Arts Center Akita

## 哲学カフェ

参加者と意見を交わす  
ある答えを探求する

「未来の生活を考えるスクール」全4回、各登壇者のお話の後、鈴木祐丞氏による「哲学カフェ」が実施されました。

第1回は会場の皆さんと、コロナ渦に浮かび上がる様々な問題について対話しました。鈴木氏「ここでは“真理”、仰々しい言い方でなければ“答え”を探求していきます。ルールは“人それぞれ”という考え方は一旦やめよう、必要な批判はきちんとやりとりを通して考えていく等。それと、立場は対等だということ。テーマは例えば「帰省をしますか?そもそも帰省したいですか?」

## 第2回

# 「個性と多様性と —自由にふるまい表現すること—」

柚木恵介 橋本誠 鈴木一郎太



### 柚木恵介 Keisuke Yunoki

(写真左 アーティスト、秋田公立美術大学准教授・つくりかたつどいかたデザイン)

1978年生まれ。東京藝術大学デザイン科修了。インテリアデザイナーを経て、東京藝術大学、法政大学にて勤務後、2019年から秋田公立美術大学ものづくりデザイン専攻准教授。その土地に定期的に通い、人々と関わることをテーマにプロジェクトを展開。「鳥の家プロジェクト」「小豆島高校おみやげクラブ」などの瀬戸内国際芸術祭(2013)への参加をはじめ、「物々交換プロジェクト at タイ+だいが」(2015)、「物々交換プロジェクト at KENPOKU」(茨城県、2016)など。

### 橋本誠 Makoto Hashimoto

(写真中央 NPO法人アーツセンターあきたディレクター、アートプロデューサー)

1981年東京都生まれ。横浜国立大学教育人間科学部卒業後、フリーランス、東京文化発信プロジェクト室(現・アーツカウンシル東京)を経て2014年に一般社団法人ノマドプロダクションを設立。2020年よりNPO法人アーツセンターあきたディレクター。多様化する芸術文化活動と現代社会をつなぐ企画に制作・広報・記録など様々な立場で携わる。共著に『これからのアートマネジメント』(フィルムアート2011)。

### 鈴木一郎太 Ichirota Suzuki

(写真右 (株)大と小とレフ取締役)

静岡県浜松生まれ。20代をアーティストとしてロンドンで過ごしたのち、認定NPO法人クリエイティブサポートレッツで障害福祉と社会をつなぐ文化事業に携わる。その後、ソフト企画からハード設計までを扱う(株)大と小とレフを立上げ、文化、福祉、まちづくりなどの分野において、主体者の思いを整理し未来を見出す手助けをしている。静岡県文化プログラム・コーディネーター、NPO法人こえとことばところの部屋理事。

子どもや障がいを持つ人をはじめ多様な個性を持つ人々が自由にふるまい表現できる場所を、デザインし、生み出してきた活動をふり返りながら、コミュニケーションの方法を見つめ直しました。

静岡を拠点にアートディレクションや場づくりの実践を行う鈴木一郎太氏と、全国各地の人々と関わることをテーマにプロジェクトを展開しながら、子どもたちが自ら考え行動し、創造力を養う「カマクラ図工室」に“見守り師”として参加する柚木恵介氏。進行は、美術館・ギャラリーだけではない場で生まれる芸術文化活動を推進するアートプロデューサー、橋本誠氏がつとめました。

橋本氏によると「お二人に共通しているのが、日常でない場、もしかしたら昔はあったのかもしれないけれど、今はなくなってしまったような場とか機会とかコミュニティを、どう作り、紡ぎ直せるのかという問いではないかと思います」。

### 場を開く運営

鈴木氏の「場づくり」の具体例は、「黒板とキッチン」というコミュニティスペースの運営。多様な人が思い思いに過ごせるよう、あえて企画を主催せずに、場を開く運営を心掛けているそうです。

「この場所では、出会うと思わなかったものと出会うきっかけが生まれたいいな、という思いがあります。自分が興味あるものを選び取るのではなくて、たまたま出くわすことが物理的にできる。偶然起こったことの価値や面白さに気づけるか。そこで出くわした人たちが何かを始めて、そのちょっとドラマチックなこ

とに出会った瞬間、その輪に自分が入ってなくて、少し離れたところから遠目で見ている。至福の時間だなと思います」。

### 子どもたちの自立を見守る

一方、柚木氏は、神奈川「カマクラ図工室」の“見守り師”をつとめています。

「社会全体を図工室に見立て、人との出会いや活動場所、予定、食事、制作、話し合い等に至るまで子どもたちが自ら作ることを大切にしています。関わる大人は、特別なお膳立てをしたり管理的な指導をしたりすることよりも、大人は大人の時間を過ごすこと。子ども達がやりたいことに没頭できる環境とともに安全に失敗できる環境を整えようと心掛けています。子ども達は原っぱのようなぼっかり空いた時間と空間の中で、さまざまな人・もの・ことと関わり合いながら絶えず自分を造形、解体、再構成し、ヴァージョンアップしながら自立に向かっていくと考えています」。



全文はこちらから

### 「未来の生活を考えるスクール」

第2回「個性と多様性と—自由にふるまい表現すること—」

日時 | 2020年8月30日(日) 14:00 ~ 16:15

会場 | YouTubeチャンネル Arts Center Akita

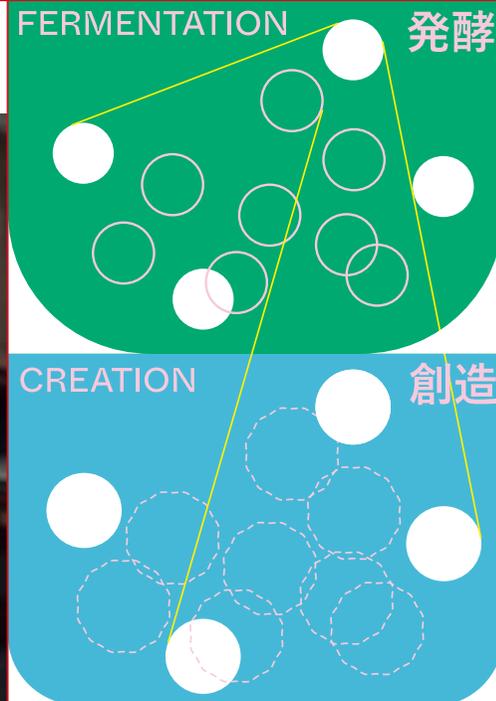
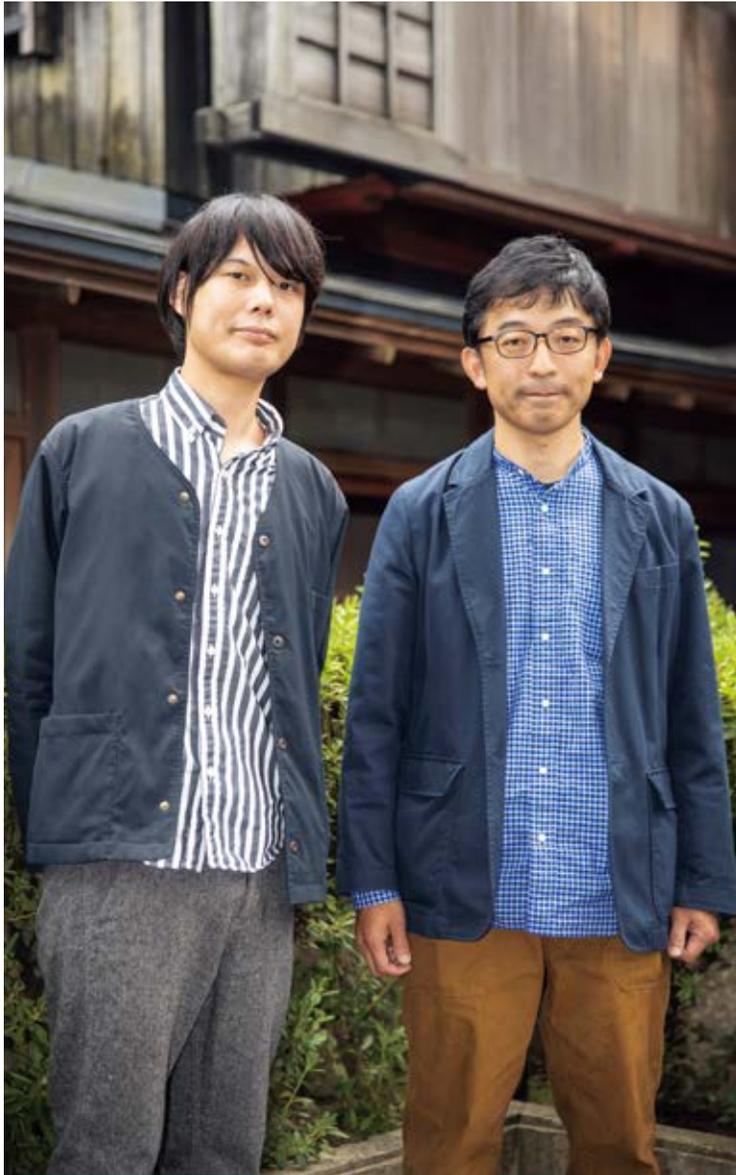


# 未来の生活を考えるスクール

## 第3回「発酵と創造」

# 3

小倉ヒラク 石倉敏明



小倉ヒラク Hiraku Ogura  
(写真左 発酵デザイナー)

「見えない発酵菌たちのたらしきを、デザインを通して見えるようにする」ことを目指し、全国の醸造家や研究者たちと発酵・微生物をテーマにしたプロジェクトを展開。東京農業大学で研究生として発酵学を学んだ後、山梨の山の上に発酵ラボをつくり日々菌を育てながら微生物の世界を探索している。アニメ『てまえみそのうた』でグッドデザイン賞2014を受賞。著書に『発酵文化人類学』『日本発酵紀行』。YBSラジオ『発酵兄妹のCOZY TALK』パーソナリティ。2020年4月に下北沢に店舗「発酵デパートメント」オープン。

石倉敏明 Toshiaki Ishikura  
(写真右 秋田公立美術大学・大学院准教授)

1974年東京都生まれ。人類学者。秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻准教授。シッキム、ダージリン、カトマンドゥ、東日本等でフィールド調査を行ったあと、環太平洋地域の比較神話学や非人間種のイメージをめぐる芸術人類学的研究を行う。美術作家、音楽家らとの共同制作活動も行ってきた。2019年、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際芸術祭の日本館展示「Cosmo-Eggs 宇宙の卵」に参加。共著に『野生めぐり 列島神話をめぐる12の旅』『Lexicon 現代人類学』など。

「目に見えない微生物によって人間の文化は導かれている？」

発酵・微生物をテーマにしたプロジェクトを展開する「発酵デザイナー」小倉ヒラク氏によるプレゼンテーション。後半は、美術家・音楽家らとの共同制作も行う人類学者の石倉敏明氏との対話が展開されました。

### 発酵から発酵文化へ

醤油、味噌、みりん、酢、日本酒、焼酎などのベースとなる麹カビに代表される日本の発酵文化。小倉氏はそのルーツについて、さまざまな地方の事例から解説しました。

「日本人がいかにか微生物の世界とコミュニケーションしてきたのかを突き止めるべく、日本各地をめぐるながら“微生物とともに日本人は文化をつくってきた”ということを強烈に認識しました。2018年の夏から2019年の春まで全国71カ所を回ってみたいところ、秋田代表は〈ハタハタ寿司〉と〈しょつつる〉ですね。青森十和田の〈ごど〉、宮崎日南地方の〈ムカデノリ〉、長崎県対馬列島の〈せん団子〉、高知の山奥には〈碁石茶〉という発酵茶、青ヶ島という火山島には〈青酎(あおちゅう)〉というのもありました。発酵を専門にしている僕でさえ3分の1は知りませんでした」。

### 発酵が社会を再生する

続いて、日本では1000年もの歴史を持つ発酵文化が、今どのように蘇っているかというお話。小倉氏によると発酵業界は若返りの時期で、30～40代の生産者もとても頑張っているとのこと。

「秋田市の鶴養(うやしな)では、新政という酒蔵がお米をつくっています。発酵というと、生命が蘇るといった古くからの意味もありますが、現在も、例えば新政が入ることによって鶴養の超高齢化社会が活

気づき、森や田んぼを手入れすることで、土地の生態系も再生する。発酵は単なる昔へのロマンだけではなく、課題がたくさんある日本の社会の未来をつくっていくために、とても重要なものではないかと思いつきながら活動しています」。

石倉氏「実は、発酵と創造性の深い関係は、酵素がエネルギーを発生させるように、ジワジワと現実を変えていく力にあると思うんです。今、古い建物をあえて壊すのではなくて改装して、新しい時代にあったデザインやアートを生み出すような活動が増えてきています。秋田の酒造メーカーも、古い酒樽を使って、微生物の力で新しい文化の潮流を作り出そうとしていますよね。科学とアートの力を結びつけることで、大きな革新が起こっています。これは“トランスフォーム(変形)”じゃなくて“トランスミューテーション(変成)”。つまり大豆が味噌になったり醤油になったりするのと同じで、カビの働きで化学反応が発生し、アミラーゼができるということですよ。このあたりが、21世紀の地域をつくる創造性と繋がってくるのかなという気がします」。



全文はこちらから

「未来の生活を考えるスクール」

第3回「発酵と創造」

日時 | 2020年10月3日(土) 14:00～16:30

会場 | 秋田市民俗芸能伝承館(ねぶり流し館)



# 未来の生活を考えるスクール

# 4

## 第4回

## 「農業・遊び・絵本

## —子どもが世界と出会うとき—

菊地晃生 工藤留美 澁谷香織 小熊隆博



**菊地晃生 Kosei Kikuchi**  
(写真左 たそがれ野育園 園主)  
1979年秋田県生まれ。豊橋技術科学大学大学院修了。名古屋工業大学大学院を経て、2005-2007年高野ランドスケーププランニング株式会社入社。2008年帰農。農業・化学肥料を使わない栽培方法での営農を実践・自主販売を始める。「ファームガーデンたそがれ」として水稲ほか大豆、小麦、ブルーベリー、枝豆などを主に栽培。また「たそがれ野育園」として、農的暮らしの学び場を主催している。その活動で2018年環境省第6回グッドライフアワード森里川海賞受賞。

**澁谷香織 Kaori Shibuya**  
(写真右から2番目 絵本と紙もの すずらん舎 代表)  
図書館司書として約12年間県外の県立図書館に勤務。結婚を機に地元秋田へと戻り、2014年より「絵本と紙もの すずらん舎」として活動を開始。オリジナルの紙雑貨の製作販売と、絵本の読み聞かせやワークショップ、中古絵本の販売、絵本による空間作りのお手伝いなど「絵本」をテーマにした活動を行っている。

**小熊隆博 Takahiro Oguma**  
(写真右 ギャラリーものかたり 主宰)  
2015年まで7年間「ベネッセアートサイト直島」の美術施設の運営管理に携わった後、合同会社みちひらきを設立。2016年に絵本、地元職人によるオーダー仕器等を展示販売するプロジェクト型ギャラリー「ものかたり」(秋田県五城目町)を開設し、近年は秋田公立美術大学による地域連携型アートマネジメント人材育成事業「旅する地域考」(2018-)、東北の子どもに向けた芸術教育支援活動「子ども芸術の村プロジェクト」(2016-)の企画運営に参画。京都芸術大学通信制大学院芸術環境研究領域非常勤講師。

**工藤留美 Rumi Kudo**  
(写真左から2番目 のはらむら 代表)  
幼稚園教諭として20年間幼児教育に携わった後、大学職員を経て2014年におもちゃと遊びの専門店「のはらむら」を開業。木のおもちゃや絵本、アナログゲームを取り扱っている他、おもちゃ選びのアドバイスや保育環境のコーディネートを行っている。また、「あそび」と「おもちゃ」の大切さを、ワークショップやイベントを通して伝える活動を行っている。



秋田で農薬や化学肥料に頼らず稲・野菜づくりを行う「たそがれ野育園」園主の菊地晃生氏、おもちゃと遊びの専門店「のはらむら」を営む工藤留美氏、絵本をテーマに活動する「絵本と紙もの すずらん舎」代表の澁谷香織氏。「ギャラリーものかたり」を主宰する小熊隆博氏が聞き手となり、これからの未来、子どもが世界とつながる方法を探りました。

普段は家でお父さんやお母さんなど家族と過ごしている子どもが地域の大人たちと出会う、世間という意味での「世界」。国内から国外へと旅立つ、それも「世界」。あるいは自分が活躍しているフィールド、それも「世界」。小熊氏から三人への質問、「世界」と出会ったのはいつですか？」を契機に、それぞれの人生のターニングポイント、三人が模索し実践する子育ての多様な可能性、そして子どもたちの未来へと、話は広がっていきました。

### 子どもたちの未来に一言

工藤氏「これからの子どもたちには、想像を超えたいろいろなことが待ち受けています。でも、生きていく力、基本的な力を備えておけばどうにかなる。「あなたは大丈夫」と言ってあげられるように、大人として子どもたちの未来を応援したいと思っています」。

澁谷氏「絵本を読むことは、子どもの心に種を撒くことと言われることがあります。芽が出ないかもしれないし、思っていたのと違う芽かもしれない、芽が出るのもいつになるのか分からない、でも親としてたくさん種を撒いてあげたい、と思っていました。今は、いや、種巻きではなく土壌だな、と思えてきていま

す。子どもと接していると、絵本なんてほんの一部だな、と思いきり、模索中ですし、正解はありません。今は種を撒く前の土壌を豊かにすることを探っています」。

菊地氏「子育ては、百人いれば百通り違う考え方がある、答えのない世界です。それでいいかどうかを日々自問自答して、その人が自分で考えることに意味がある。違う考えを認め合う、そういう輪があればいいなと思います。僕の場合、子どもたちに出会ってほしいのは、畑で育った取れたての、トマト、キュウリ。そこでしか食べられない味を経験することは、子どもの世界が広がる瞬間かもしれません。子どもが田畑に来ることで、僕ら大人にない感性を教えてください。村度がないからなんでも言うし、蛇も首に巻くし。親と子どもが出会った瞬間、それぞれの扉が開かれる、そこに未来があるんじゃないかと思っています」。



全文はこちらから

### 「未来の生活を考えるスクール」

第4回「農業・遊び・絵本—子どもが世界と出会うとき—」  
日時 | 2020年12月13日(日) 14:00~16:10  
会場 | あきた文化交流発信センター「ふれあーるAKITA」



# みんなで 乾杯の練習

秋田市文化創造館で実現してみたいアイデアを持ち寄り、  
実現に向け話し合う「みんなで乾杯の練習」。  
市民のアイデアをもとに、3つの企画を実現しました。

1つ目は… **「フードグランプリ～限界飯編～」**

今回は「限界飯編」。一人暮らしを始めて寂しかった、忙しく走り回って頑張っていた、何かにハマって節約していた、お金がなかった……。そんなときに生み出した「限界飯」のレシピをエピソードとともに披露する、という内容で、オンラインで開催しました。

この企画の発案者は、松野輝大さん。美術や音楽、ダンスなどの文化芸術だけではなく、身近な文化に親しめる機会があればという思いから、「食」にまつわる企画、しかも“限界”時のいろんな工夫やアイデアが入ったレシピを紹介するという内容です。

司会はローカルタレントの神長タクミさん。そしてコメントーターに、秋田市内でスリランカカレーと紅茶の店を営む谷洋子さん、北秋田市の根子集落に住む写真家でマタギでもある船橋陽馬さんをお迎えしました。

今回のイベントでは、応募総数16の限界飯の中から5つのレシピをご紹介します。オンラインで視聴されている皆様とコメントーターお二人の投票でグランプリを決める、という内容です。

イベント当日披露された限界飯と、そのエピソードを紹介します！



「フードグランプリ」は、地域や各家庭、  
個人で親しんでいる料理を紹介し合うことで、  
身近な「食文化」について考える  
機会をつくるイベントです。



「限界鶏めし」  
しましゅんさん

メニュー名に“限界”と書いてありますが…普通の炊き込みご飯のように見えます。

しましゅんさん「一人暮らしを始めた頃、ずっとコンビニ飯を食べていたんですよ。そしたらだんだん手に湿疹ができてきたりするようになって。これはちゃんと自炊しないとイケないという

ことで、作りはじめたのがこのメニューです。包丁もまな板も使わないで調理できるし、味付けはシンプルに『味どうらく』のみです」

試食したコメントーターのお二人の感想は…

船橋さん「あれ？ なんか、普通においしい」

谷さん「とてもいい香りです。包丁を使わないで作れる、というところもポイント高いですね」



「おかららん、  
はい、チーズ。」  
オバキューピーさん

\* \* \*

ユニークな名前のこの料理は、オバキューピーさんのレシピ。

高校生の娘さんの空腹を満たすために考案したメニューだそうです。

オバキューピーさん「鶏皮はスーパーで激安で販売されているし、おからも安く手に入るの、材料費は“限界”まで節約できます。そ

# 1

してお腹の中でふくらむので、食べ盛りの娘も満足。かわいいグラタン皿に入れて作ると娘も喜びます」

谷さん「とてもおいしい！タンパク質やカルシウムもとれる、育ち盛りの子どもにぴったりのメニューですね」

船橋さん「腹持ちがいいので、ダイエットにもいいかも」  
こちら高評価でした。

\* \* \*

まつまるさん「社会人1年生の時、お給料が入らない期間が2ヶ月あって、金欠で困っている、一緒にアトリエを借りていたメンバーに『なまず釣りに行かない？』と誘われて(笑)。スーパーで買った鶏皮を餌にして、利根川で釣っていました。それを1ヶ月くらいしてて。その時のなまずの味を、この料理を食べると思い出します」



「なまずを思い出す、  
OO丼」  
まつまるさん

…あれ？ これって、うな丼にそっくりだけど？

実は、今回のオンラインイベントではさすがにナマズを釣ってくることはできず、かわりにまつまるさんご指定の某チェーン店の「うな丼」をお出ししました。ちょっと反則技でしたね、ごめんなさい。

谷さん「なまずの調理自体、大変だったのでは？」

まつまるさん「釣った直後は泥臭くて食べられないので、数日きれいな水の中で泥ぬきをして調理しました。頭が大きくてぬるぬるしてさばくのも大変でした」

船橋さん「うーん、一度なまずを食べてみたい。本当に今日食べたコレを思い出さずかどうか(笑)」

\* \* \*

発案者の松野さんのレシピは、限界感・最強の内容でした！



「糖を煎って低脂肪  
乳をかけた物」  
松野輝大さん

松野さん「大学を卒業して2年間ほど自営業で頑張っていた頃、なんとか生活していかなければ、という時期に食べていました。最初は玉ねぎをまるごとレンジで温めて食べるのにハマっていたんですけど、だんだん飽きてきてこれを試してみました」

船橋さん「最初に口に入れたときの粉っぽさがすごいですね…」

谷さん「低脂肪乳がかけてあるのにもかかわらず、別に飲み物がないとのどに詰まっちゃう感じ」

船橋さん「確かに米糠の甘みを感じます…松野さん、これ食べていたんですね」

松野さん「はい、その甘みでけっこう食べられてました」

谷さん「糠そのものはスイーツの材料に使うそうですね。パウダーケーキやクッキーに混ぜたり、ヨーグルトにかけたりすれば、ヘルシーですね」

コメントーターの苦い反応をよそに、自作の米糠を美味しくうにたいらげた松野さん…強者です！

\* \* \*

田村さん「大学に入った当時、馬肉入りのコンビーフがひと缶80円くらいだったんですよ。仕送り日の前にはこれを4日に



「勝手なドイツ丼」  
田村一さん

分けて食べよう。じゃがいもはもともと安いので、コンビーフをジャガイモでかさ増しして、卵を入れて、ご飯に乗っけて食べる。そんな料理です」

船橋さん「田村さん、ごちそうさまです。おいしかった！」

谷さん「カフェメニューにありそうですね、おしゃれ！」

田村さん「今となってはコンビーフは値上がりして、限界飯というより高級メシになっちゃいましたね」

オンライン投票の結果は……

- 1位 「限界鶏めし」
- 2位 「糖を煎って低脂肪乳をかけた物」
- 3位 「勝手なドイツ丼」
- 4位 「おかららん、はい、チーズ。」  
「なまずを思い出す、OO丼」

1位と2位は2票の僅差で、グランプリは、しましゅんさんの「限界鶏めし」に決定しました！

配信終了後は、参加者とコメントーターのお二人を交え、zoomでミニ交流会を行いました。モニター越しの会話は、楽しそうに盛り上がっていましたが、秋田市文化創造館の開館後、直接顔を見て再会できればいいと思います。



「フードグランプリ～限界飯編～」

日時 | 2020年8月23日(日) 11:00 ~ 13:00

発案者 | 松野輝大

コメントーター | 谷洋子、船橋陽馬

司会 | 神長タクミ

会場 | YouTubeチャンネル

Arts Center Akita

協力 | スタジオ VK、

TEA LANKA、根子写真館



レシピ集はこちらから

# みんなで 乾杯の練習

# 2

市民のアイデアから生まれた企画、2つ目は、

## 「ダイアリーシアター～千秋公園編～」

「ダイアリーシアター」は、街のさまざまな場所を訪れ、そこでの経験をもとに戯曲（演劇の台本）を書き、演じてみることで、この街や私たちのことを再発見するワークショップです。



この日は、4グループに分かれ、ナビゲーターとともに千秋公園内を散策。散策中に見た風景や思い出した記憶をもとに、4本の戯曲が完成しました。

### 日常に寄り添う演劇

朝10時、集合場所となったのは千秋公園内の「鯉茶屋」。まずは「アイスブレイク」で緊張をほぐし、今の気持ちを一言ずつ伝え自己紹介。「ウキウキしています」「昔ここでお花見をしたことが懐かしいです」などのほか、「秋田にこんなに演劇に関心がある人がいて、コロナ禍でも集まっていることに感謝しています」という声も聞かれました。その後、今回の発案者でナビゲーターの島崇さん（劇作家・演出家）が、企画を説明。「今日は戯曲を書いてみるということを目指したいと思っています。そうは言っても、難しいと思う人が多いと思うんです。セリフを書いてみるって、ほとんどの人はやったことがないと思うんですね。でも、誰でもできるんじゃないかと思うんです。演劇には、歌って踊るハードルが高いものだけではなく、日常に寄り添うような我々誰でもできるような表現形態もあります。普段の生活を戯曲にすることで、新しい発見ができるんじゃないかと思っています」。

### 聞いたり、感じたことを、そのまま再現する

まずは参加者が、4つのグループに分かれて千秋公園を散策します。島さんから提案されたのは、散策中に見たり、聞いたり、感じたこと、交わった会話そのままを、セリフやト書き（場所・登場人物など動作や設定を表す文章）として再現するという手法。「散策した人が、登場人物・本人として話す・動くこ

とを基本に書いてみてください。ですが散策中は、会話や風景、そして感じることに集中してください。よく聞いて、よく見て、思い出して、妄想を膨らませてください。例えば散策中に昔の記憶をモヤモヤモヤと思い出したり、何かふと頭によぎったら、それを大事にしてください。良いことも、悪いことも。それを散策から戻ってきたら思い出して、声に出して、戯曲として書き出してみてください」。

参加者には千秋公園の地図が渡され、「二の丸広場」「胡月池」「御隅櫓」「本丸跡」とグループごとに散策の中心となるスポットが案内されました。

### 秋田の日常が浮かび上がる4本の戯曲が完成

散策後、グループごとにセリフやト書きを書き起こし、その場で立てて戯曲を読み上げ上演するまでが一連のプログラム。演劇未経験者が多かったため、当初は戯曲を時間内に書き上げられるか心配していましたが、どのグループも個性的な物語を書き上げ、動作の演出も入るなど予想以上の仕上がりに。ぜひ次頁QRコードの戯曲集を読みながら、秋田の日常が浮かび上がる各グループの上演を想像してみてください。

### 各戯曲のタイトルと参加者・ナビゲーターのコメント

#### ●タイトル：「二の丸跡にて」

散策スポット：二の丸広場

登場人物：サイトー、ヨシナリ、ビルカワ

参加者「千秋公園を散策していると自分の思い出がよみがえってきたんです。それを話したらアレンジがどんどん進みました。手つなぎ鬼も池に落ちたことも実話です（笑）。日常ってすごく大事だし、自分の過ごしてきた時間って忘れていよう自分の中にあるんだと改めて思いました」

島さん「このチームには演劇経験者がいて、上演では戯曲にないアドリブが飛び出すなど軽妙なやりとりが生まれました。発表順が一番手だったこともあり、次からのチームの後押しになると思います」

#### ●タイトル：「女子旅」

散策スポット：胡月池周辺

登場人物：県外女1、県外女2、県外女3、県内女1

加賀屋さん（ナビゲーター）「それぞれのキャラクターが立っていたのもおもしろいし、最初から4人が登場するのではなく、県外女3人がヤキモキして待っているところに県内女ひとりが呑気にやってくるという落差を表現しているところが演劇の手法としておもしろかったです」

#### ●タイトル：「御隅櫓にて」

散策スポット：御隅櫓

登場人物：男1、男2、女1、女2

島さん「冒頭、エレベーターの中で4人がギュッとしているシーンで時間をたっぷりと使っているのが良かった。ちょっと気まずい感じも伝わってきました。舞台の後ろの空間も使ってるって回る様子を見せるなど、セリフだけでなく体によって御隅櫓の風景を我々に想像させてくれました」

加賀屋さん「ぎゅーっと詰め込まれた状態から最上階に着いて全員が散らばった時の開放感が見ている方にも感じられました」

#### ●タイトル：「はじめての千秋公園」

散策スポット：本丸跡周辺

登場人物：ひな、さな、ちな

児玉さん（ナビゲーター）「誰が主導でもなく、3人それぞれの演劇的なアイデアやセリフが折り重なってつくられていく様子を見て、ものってこういう風につくるんだと教えられました」

加賀屋さん「うまく見せようとかこれを折り込もうという魂胆みたいなものがないのいいと思いました」

島さん「我々がアドバイスすることもなく、演劇部でもないけれど淡々と書いて稽古していました。3人の生きているリアルな日常をそのまま描いてくれたのですごく伝わるし、最後の『また会いたいね』という言葉で刹那的にシーンを切り取って、うるっときましたし、もう二度と来ない時間や瞬間をしっかりと目撃することができました」

### 秋田のまちを上演する

ワークショップ当日、上演を見ていると、演じられているのは「鯉茶屋」の座敷の上で、そこに舞台はないけれど、公園内の景色が目浮かぶようでした。

「ダイアリーシアター」は場所を変え、文化創造館開館後も開催される予定です。駅や商店街など、秋田のまちのどこかへ赴き、その場での体験をもとに戯曲を書くことで、何気なく過ごしている日常を見つめ直す試み。さまざまな場所で戯曲を束ねることを繰り返して重ねていくことで、秋田のまちの戯曲を創造し、上演したいと考えています。今後の「ダイアリーシアター」もお楽しみに！



### 「ダイアリーシアター～千秋公園編～」

日時 | 2020年9月26日(土) 10:00～13:00

発案者 | 島崇 (劇作家・演出家)

ナビゲーター | 加賀屋淳

(秋田中央街区演劇研究室 / 劇作家・演出家)

児玉絵梨奈 (演出家)

会場 | 千秋公園、「鯉茶屋」



戯曲集はこちらから

# みんなで 乾杯の練習

# 3

3つ目は、ダンスと音楽のワークショップ

## 「デイ・ダンス・クリエイション+カンパイ!オルケスタ」

3月21日の秋田市文化創造館オープンを盛り上げる「ダンス」と「音楽」を一緒に考え、創るワークショップ。10代から70代まで、幅広い年代の参加者33名が、記念すべき日に向けて練習を重ねました。



10月31日に先行スタートしたのは、ダンスワークショップ「デイ・ダンス・クリエイション」。日常の生活の中のにげない動きをダンスに取り入れ、オリジナルダンスを創ろう、という内容です。この企画は、秋田市在住の社会人・信太亜華音さんのアイデアから生まれました。「秋田は、国内でも有数の民俗芸能の宝庫であり、ダンスも盛んです。そこで、ダンスや演劇で、秋田を盛り立てることができないか? というのが、この企画の出発点です」とのこと。信太さんも、今回のダンスワークショップに参加しています。

「デイ・ダンス・クリエイション」は、11歳から74歳まで、かなり幅広い年代の19名が集まりました。講師は、ダンスサーカス集団「BAZAR」の主宰・安達香澄さんと、山村佑理さんのお二人。自己紹介代わりのミニパフォーマンスから、ワークショップが始まりました。まず5～6人のグループに分かれ、自分の身体や感覚、他者との関わりに少しずつ意識を向け、コミュニケーションを深めていくところから始まります。1時間も過ぎた頃には、自由に、活発な表情でみなさんが動いています。始まる前は「わたし最後までやれるかわからないなあ」とちょっぴり不安そうだった70代の女性も、とっても楽しそうな表情。

後半は、布を使っただけの動きに挑戦。「かける」「なげる」「回す」「歩く」などの基本的な動きを、布を使って自由に表現していきます。その後、3つのグループに分かれて一人一人が考えた振りをもとに短いダンスをつくり、発表してみました。ついさっき

初めて出会った人同士と一緒に、ダンスの小品をつくって発表できるなんて、これはすごいことです!

2回目となる12月26日は、音楽ワークショップ「カンパイ!オルケスタ」も同時開催。超初心者から一人で何種類もの楽器をこなす方まで、個性的なメンバーが揃いました。

この日のワークショップは、「カンパイ!オルケスタ」講師の英心&The Meditationaliesの皆さんによる、オリジナル曲「あきたすか!」の演奏からスタート! 粋な都都逸の一節から始まる歌詞には、ふるさと秋田への愛情がいっぱい詰まっています。曲の終盤には馴染み深い「秋田県民歌」がフィーチャーされていて…

自然に踊りたくなるアップテンポで明るい曲なのにじんとくる、素敵な曲です。「一人ひとりが輝ける仕掛けをたくさん盛り込みました」と英心さん。この曲に、それぞれのアイデアやソロ演奏を加えています。

音楽ワークショップなのに、いきなりダンスから始まる音楽チーム(笑)。曲のベースとなっている南米ジャマイカで生まれた「スカ」を身体で覚えるのがねらいです。裏打ちリズムに合わせて腰を落とし、腕を動かしながら、徐々に身体に染み込ませていきます。その後楽器別に分かれ、練習を重ねました。

一方ダンスチームは「秋田のハレとケ」ときいて思い浮かぶイメージを出し合い、それをもとに新たな振りを考えました。ジャグリングの白いボールが、雪の玉になったり、だまこになったり…一人一人が創り出した多彩な振り付けがまとまっています。

後半は、いよいよ音楽チームとダンスチームが合流し、お互いの成果を見せあひっこ。そして曲に合わせて一緒にパフォーマンスしてみました。始まる前は広いと感じていたホールのスペースが窮屈を感じるほど、エネルギーがはちぎれていました! この日の様子は秋田市文化創造館のYouTubeで公開中です。

1月からは再びダンスと音楽に分かれて練習を重ね、3月21日の秋田市文化創造館のオープン日にお披露目予定です。素敵なパフォーマンスで文化創造館の幕開けができそうです!



### 「デイ・ダンス・クリエイション」

発案者 | 信太亜華音  
日時 | 第1回: 10月31日(土) 13:00 ~ 16:00  
第2回: 12月26日(土) 13:00 ~ 16:00  
会場 | 第1回: アルヴェ 2階 多目的ホール  
第2回: センターズ  
講師 | ダンスサーカス集団BAZAR (安達香澄 山村佑理)

### 「カンパイ!オルケスタ」

日時 | 12月26日(土) 13:00 ~ 16:00  
会場 | センターズ  
講師 | 英心&The Meditationalies

## コミュニケーション・プログラム

### 「カルチャカイ」

秋田のまちなかで何かやろうと考えていることや考え始めたこと、モヤモヤとしてきていることなどを紹介したり、べちゃくちゃと話したりする場「カルチャカイ」。

11月3日と12月20日の2回、にぎわい交流館AUのアート工房で開催しました。

ナビゲーターに秋田公立美術大学の藤浩志教授をお迎えし、参加者の野望や妄想、アイデアへの意見や情報、アイデアの交換がゼミのような形で、ゆるやかに行われました。

「まちなかで、何かをやるということは、どんなことでも絶対に無駄にならないという確信を持っています。その何かは開花しないかもしれない、上手く行かないかもしれない。それでも、土壌を良くしていく。そのためにいろんなこと、無駄かもしれない



こと、失敗をいっぱいやっていこう!という藤さん。参加者からでてくるアイデア、妄想、計画の発表に、次々と事例や感想、そして全く関係がないかもしれないことなども自由に話し、終始アハハと笑い声が聞こえてきました。さらに参加者からもユニークな意見が出てきて、様々な妄想の展開が止まりませんでした。そんな話のやりとりを聞いていて、新たに何か思いついた方もいるかもしれませんね。「カルチャカイ」は、秋田市文化創造館開館後も定期的に開催していきます。

## 「あきたすか!」

作詞・作曲: 英心 / 編曲: 英心 & The Meditationalies

おお 山よ おお 川よ  
いつもいつでも いつもいつでも  
あなたのそばに  
いつもいつでも いつもいつでも  
見守ってるよ

咲いた咲いたでつい浮かされて  
花を求めて西又東  
じゃんこ切らして帰ってみれば  
庭じゃ梅が笑ってる

明るい未来思い描いて  
俺とお前と秋田暮らし  
心耕し帰ってみれば  
今日も酒が美味しいでしょう

昨日の雨に みのりを結べ  
ああ わがふるさと秋田

おお 海よ おお 空よ  
いつもいつでも いつもいつでも  
あなたのそばに  
いつもいつでも いつもいつでも  
見守ってるよ

真っ赤っかな夕焼けに 心を焦がせ  
ああ わがふるさと秋田

変わっていくけれど 君を待ってる  
ああ わがふるさと秋田

# SPACE LABO

秋田のまちの余白/空間を「新しい価値を生み出す実験的な場所」として見立て、実現したい企画を募集する「SPACE LABO」。

2020年度、応募総数33の中から選ばれた4企画と、  
2019年度レジデンス賞受賞者による新作を、  
秋田市中心市街地やマスメディアを舞台に公開しました。

協力 | ABSラジオ、東日本旅客鉄道株式会社 秋田支社、株式会社OPA (2020年度 企画公開) 東北物産株式会社 (2019年度 レジデンス賞 受賞者展)

審査員を務めたのは、金子由紀子氏(青森公立大学国際芸術センター青森(ACAC)主任学芸員)、鈴木一郎太氏((株)大と小とレフ取締役)、橋本誠氏(アートプロデューサー、NPO法人アーツセンターあきた ディレクター)の3名。チャレンジ性や発展性などを基準に、会場提供にご協力いただいた企業からもコメントをいただきながら審査を行い選出しました。

## 2020年度 企画公開

### グランプリ

(2021年度、秋田市文化創造館での表現の機会の提供およびその支援)

### 松田朕佳・雨宮滯

Chika Matsuda・Miwo Amemiya

「865mm×1578mmの7連サイネージと15m×7.5mのトピコの壁を水に浮かべる」

会場 | JR秋田駅 改札上サイネージ、駅ビル「トピコ」壁面プロジェクション  
日時 | 11/1(日)～28(土)  
サイネージ | 随時  
プロジェクション | 17:30～30分毎

普段なにげなく見ているものの大きさを体感するために、同じサイズで別の素材・用途で置き換えてみると、元となったものの見方も変化するのはないか、という発想から、ビルの壁面やサイネージと同サイズの「筏(いかだ)」を実際につくり、水へ浮かべてみるという試み。地域の方と協力して海に浮かんだ筏は、アニメーションや、口ずさみたくくなるような歌声、ピアノや海の音を乗せて、秋田駅前を歩く人々の前に毎日現れた。

松田朕佳 現代美術家。2010年アリゾナ大学大学院Fine Arts修了。国内外のレジデンスを経て現在長野県在住。おもに立体造形を制作。

雨宮 滯 ファシリテーター、プロセス&コミュニケーションデザイナー。個人と組織の変容プロセスの伴走者。千葉県在住。



### 船山哲郎

Tetsuro Funayama

「新しい茶の湯のためのスタディ」

会場 | 秋田オーパ 1F 吹き抜け  
パネル・映像展示 | 11/1(日)～28(土)  
茶会 | 11/1(日)、15(日)、28(土) 14:00～

新型コロナウイルスの感染拡大によって人とのかわりに制約ができ「新しい生活様式」が示された今、改めて「茶の湯」の作法と空間性を探ることで見出された「新しい茶の湯」の実践。鏡を介して対面し、お手前を受けられる茶室を秋田プライウッド株式会社から提供を受けた秋田県産の木材で制作。裏千家淡交会秋田青年部の協力を受けて、一般の方も参加できる茶会を、秋田オーパ1Fの吹き抜け空間で「野点」として行った。



### 大脇響子、齋藤涼花

Kyoko Owaki, Suzuka Saito

「人付き合いの在り方に革新を」

会場 | フォンテAKITA 6F 情報発信コーナー  
展示 | 11/1(日)～28(土)  
ワークショップ | 11/1(日)、7(土)、8(日)、15(日)、21(土)、22(日)、23(月) 13:00～

新型コロナウイルスにより、オンラインでのコミュニケーションが主流になった今、人と快適に話すだけの場所を作る試み。ターゲットは秋田市内の中高生。

## 審査員特別賞



### 内田聖良

Seira Uchida

「余白書店 公開査定会@ABSラジオ」

会場 | ABSラジオ  
「まちなかSESSIONエキマイク」番組内企画  
日時 | 11/4(水)、25(水) 14:00頃～15分間

「読者が創作した価値ある余白本」として、書き込みやシミのある本を評価し販売する『余白書店』。ラジオのリスナーに「余白本」を募集、番組内でその魅力を探った。

## 2019年度 レジデンス賞 受賞者展

11/1(日)～28(土)の金土日・祝

### 居村浩平

Kohei Imura

「ひとまねのかたち」

会場 | 旧・秋田中通一郵便局

狩猟民が持つ動物との共感性や伝統文化から、「ふるまい」を生活の中へ落とし込む試み。会場には「ふるまい」を想像させる「かたち」を展示した。



### 虻川彩花

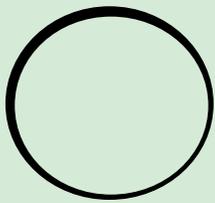
Ayaka Abukawa

「蛻変 ぜいへん」

会場 | 中通三丁目内空き店舗(旧・秋田中通一郵便局 隣)

変化すること、変化できないことに着目し、変わりゆくものの見つけ方を考えるプロジェクト。タイトルの「蛻変」とは蟬の脱皮を指す。





# 秋田市文化創造館

AKITA CITY CULTURAL CREATION CENTER

## 秋田市文化創造館

<https://akitacc.jp/>



〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町3-16

開館時間 | 9:00～21:00

休館日 | 火曜日 (休日の場合はその翌日)

年末年始 (12月29日から翌年の1月3日までの日)

お問い合わせ |

TEL: 018-893-5656 FAX: 018-893-5659

e-mail: [info@akitacc.jp](mailto:info@akitacc.jp)



## アクセス

### □ 電車で

JR「秋田駅」西口から徒歩10分

仙台から	秋田新幹線「こまち」(仙台～秋田)	約2時間15分
新潟から	羽越本線「特急いなほ」(新潟～秋田)	約3時間35分
青森から	奥羽本線「特急つがる」(青森～秋田)	約2時間45分

### □ 飛行機で

札幌方面から	新千歳空港～秋田空港	約1時間10分
東京方面から	羽田空港～秋田空港	約1時間
名古屋方面から	中部国際空港～秋田空港	約1時10分
大阪方面から	大阪国際空港(伊丹)～秋田空港	約1時間30分
	一秋田空港リムジンバス「木内前」下車	約40分

### □ 駐車場について

駐車場はありませんので、近隣駐車場をご利用ください。車いすご利用の方などはお申し出ください。